HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教師の変容と環境要因 ： 小学校教師の言語教師認知研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	中村, 香恵子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第12448号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63407
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kaeko_Nakamura_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：中　村　香　恵　子

審査委員	主査　教授	河　合　　靖
	副査　准教授	山　田　智　久
	副査　北海道教育大学札幌校教授	萬　谷　隆　一

学位論文題名

教師の変容と環境要因−小学校教師の言語教師認知研究

本論文は，小学校教師の言語教師としての認知的特徴と彼らを取り巻く環境との関係を明らかにすることで，どのような環境要因によってどう教師が変化しているのかを解明することを目的としている。本研究は，言語教師認知研究を小学校英語教育の領域で行う基礎研究と位置づけられるが，得られた知見を今後の小学校英語教育構築のための教師支援へと活用し，英語教育全体に貢献する意図を持っている。言語教師認知研究の近年の特徴として，教師と環境との関係への興味，全体的な教師理解への志向，情緒面への関心，混合研究法の増加があげられる。著者は環境要因に関わる言語教師認知研究を生態学的システム理論の枠組を用いて概観した上で，個々の枠組を超えて教師の内面を包括的に捉える研究の必要性を主張している。

小学校教師の言語教師としての認知的特徴と彼らを取り巻く環境との関係を考察する上で，著者は個人を取り巻く環境を，生態学的システム理論を基にマイクロシステム（個人内環境），メゾシステム（学校環境），エクソシステム（地域環境），マクロシステム（社会・文化的背景）の４階層に分類し，教師の認知・感情・行動の３領域に着目して，質問紙・インタビュー・グループ討議などでデータ収集する混合研究法を用いて考察している。研究課題は，小学校教師の言語教師としての特徴を，全体に共通する特徴，異なる環境で見られる特徴，それぞれの環境内での個々の特徴の３点について探ることである。

研究の結果から，著者は次の知見を得たと主張する。調査対象の教師は英語教育の領域では同一の社会・文化的背景を持つものの，異なった地域環境，学校環境，個人内環境が複雑にからみ合いながらそのときどきの状態を形成している。本研究から，動機づけや国際的志向性および教師としてのビリーフは環境要因で変化するが，学習者として得た学習ビリーフは変化しにくく，各教師の外国語学習指導実践

に影響を与えている可能性が示唆された。また，教師の自律性を高める教師支援が教師の意欲を高めることが示唆されたことから，著者は，これからの小学校英語教育にこれまで小学校教師たちが培ってきた英語教育の成果を生かして主体性を持って取り組める方向性を主張している。

本論文について，研究成果の意義，方法論的貢献，教育への示唆の３点から審査した。その結果，審査担当者は，次の点においてそれぞれ本論文の意義を認めるものである。１）教師認知研究を小学校英語の領域で行った研究は数が少なく，さらに，小学校に英語教育が導入されるこの時期にこの研究を行った点に研究の意義が認められる。２）教師認知の包括的な理解に資する広範な枠組を提案し，また，データ収集方法や分析データの提示などで新たな試みを行っている。３）基礎研究として得た知見をもとに小学校英語教育の教員研修の在り方に具体的な提言を行っている。以下，順に詳述する。

まず，１点目の研究成果の意義について述べる。英語教師認知研究は，中学・高校教師を対象とした研究を中心に進展してきた。小学校教師を対象とする研究は数が少なく新規性がある。さらに，小学校に英語教育が導入される歴史的瞬間に立ち会って教師の変容を考察することは今しか達成できない。発達心理学者ブロンフェンブレナーは，ライフコース上における変化が人の発達上の特徴を明らかにするとしている。小学校教師にとって未経験の科目である英語を教えるという変化はライフコース上の大変化であり，それを考察できる機会は今をおいて他にない。

次に，２点目の方法論的貢献について述べる。複雑かつ不確実な教師のこころの研究を，先行研究に見られないスケールの大きさで包括的な理解を試みようとしたことは賞賛に値する。研究の視点が拡散して収束が困難になる傾向を，丹念なデータの読み込みと研究結果の整理で克服している。また，グループ討議を用いたデータ収集や，Joint Display と呼ばれる方法で分析データを提示する質的分析の可視化を行っており，研究方法の改善にも貢献が見込まれる。

最後に，３点目の教育への示唆に関する評価を述べる。本研究の結果をもとに，著者は自律性を高める教師支援を提案している。小学校英語教育の導入にあたっては、既存の小学校教師の英語教育力向上が不可避の課題である。小学校教員の数の多さを考えれば，専門家がリーダー的教師に研修を行い，リーダー的教師が地域の研修を主催し，それを受講した教師が所属の学校で校内研修を実施する段階的な研修が現実的であり，実際そのように進められている。現在校内研修実施の時期にさしかかっており，自律性を高める教師支援を今提唱することに格段の意義がある。

以上の３点において，本論文は高い学術的意義を持つものである。よって著者は，北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。